

国際協力特別賞

Live the present

愛知県立千種高等学校 1年

井戸 美月

小学5年生の夏、それから4年間住むことになる中国成都市に着いた。豪華な中華料理を食べ、現代的な高層ビルの数々を見て、これから始まる新しい生活に期待が膨らみ、とてもわくわくしていた。そんな帰り道、いきなり衝撃の光景を目の当たりにした。小学1年生くらいの女の子が、渋滞中の大きな道路で、花を売っていた。靴すら履いていない。私たちの車に近寄ってきて、一生懸命頭を下げて何度も何度も花を差し出す。私がびっくりしていると、通訳さんが見ちゃだめよと言った。その通訳さんもドライバーさんとても優しい人なのに、完全無視している。周りの車も窓を開ける人はいなかった。とにかく衝撃的で、とても悲しかった。私の心に何かが生まれた瞬間だった。

インターナショナルスクールの生活の中で、多くの国籍の友人と接し、人間はみな平等であり、同じ人間であるという当たり前のことを強く意識した。と同時に、あの時の少女のことが常に頭から離れなかった。だからまず、学校のボランティア活動に参加した。それは、学校の売店で手作りの物を作り、それで得た利益で孤児院の子ども達にマフラーや靴下をプレゼントするというものだった。子ども達はとても喜んだ様子で踊ったり、飛び跳ねたり、小さな女の子が満面の笑みで私の膝の上に乗ってきた。とても可愛かった。私は充実感と満足感でいっぱいだった。しかし、その後とてもショッキングなことを知った。私たちが帰ったあと、孤児院のスタッフが子ども達からプレゼントを取り上げてしまったと。売ってしまったのか、自分の子どもに与えたのか。先生が言うには、スタッフ自身も貧困に苦しんでいる。珍しいことではないと。私はあの時のショックと悲しさと無力感が絶対に忘れない。そして、私の膝に乗ってくれた女の子の笑顔も。

その後ボランティアの仲間や先生といろいろと話し合った。その中で印象的だったのが、大切なのは物質的な支援だけでなく、教育の支援ではないかということである。貧困の連鎖は無教育の連鎖の結果だという記事を見たことがある。とても難しい問題であり、私ができることなんてないと感じた。

その後私は貧しい農村の小さな小学校を訪問する機会を得た。ブロックを積み上げただけのようなムシムシと暑い教室に50人くらいの生徒がいた。算数の授業だったが、子ども達は大きな声で発言しあって、とても楽しそうだった。交流会では一緒にサッカーをしたり、ハンカチおとしをしたりした。子ども達の目は本当にキラキラしていた。そして学校が大

好きだと言った。海外に行ってみたいから、英語を教えてほしいと言った。日本のことを聞かせてほしいと言った。私はつたない中国語で一生懸命話した。真剣に聞いてくれた。そして私も日本に行ってみたいと言ってくれた。なぜだか涙が止まらなかった。この時私は、私にもできることがあるかもしれないと思った。

果てしなく大きな夢は、貧困に苦しむ子ども達に教育という光をともしてあげたい。学校のない地域の子供達に学びの場をつくってあげたい。自分の国、日本のこと、世界のこと、自分の知っていることすべてを教えてあげたい。そのために、今私がやらなければいけないことは、恵まれた環境で教育を受けられることに感謝し、精一杯の知識を身につけること。多くの言語の習得はもちろんだが、毎日の授業、部活すべての高校生活が私の力になっているはずだ。今、この時間を大切に、多くのことにチャレンジし、視野を広げたい。それが大きな夢につながっていると私は信じている。